

●協働学習

■児童生徒自主学習型

実践タイトル

自己の課題を見付け、練習方法を選択する

本時のねらい

個人差に応じたハードル高とインターバルを設定し、3歩のリズムを感じながら走ることができるようにさせる。その際、友だちからのアドバイスやデジタルビデオカメラの映像によって、前時までに気付いた個々の課題解決に向け、自分に合った練習方法を選んで主体的に練習できるようにする。

主に活用したICT機器・教材・コンテンツ等とそのねらい

デジタルビデオカメラ

デジタルカメラでは素早い動きをうまく撮影することができないため、デジタルビデオカメラで撮影した動画を編集ソフトウェアを利用して静止画として取り出し、自己のフォームを客観的にとらえることができるようにした。

静止画

手本となるハードリングの写真を示し、ポイントを説明した。また、児童のハードリングと比較させることにより、その違いを明らかにし、本時の練習のめあてを確認させた。

参考にしてほしいポイント

上手なハードリングの動画や静止画を何度見ても、また、頭でハードリングのこつが分かっていたとしても、自分の姿を客観的にとらえることができないければ、その練習は非効率的なものになってしまう。ハードルをよりリズムカルに走り越えるためには何が必要なのか、自分のフォームを動画や静止画で客観的に分析し、問題点を克服するために必要な練習に取り組みさせた。

学習の流れ(分)	主な学習活動と内容	ICT機器・教材、コンテンツ等	
本時の展開	導入 0 6	○準備運動をする。 ○本時のめあてと学習の進め方を確認する。	・手本となるハードリングの拡大写真 ・児童のハードリングを撮影したもの(写真1)
	展開 38	○ハードリングの練習をする。(インターバル走) ・デジタルビデオカメラで撮影し合う ○自己の課題に合わせて練習方法を選択し、ハードリングの練習をする。(スタートダッシュ・踏み切りと着地・上体の使い方・インターバル・振り上げ足と抜き足) ○記録の測定を行う。(ハードル3台の40m走)	・デジタルビデオカメラ(写真2) ・PC(写真3)
	まとめ 45	○整理運動をする。 ○本時の学習を振り返る。	



写真1：ハードリングのポイントをつかむ



写真2：デジタルビデオカメラで撮影し合う



写真3：自分のフォームを確認する

児童生徒の反応

自分のフォームを友だちと比較しながら客観的に分析したことで、より上手に走り越えたい意識が高まり、練習に高い意欲が見られた。また、学習の前後に行った「運動有能感に関するアンケート調査」では、「統制感(やればできるという思い)」「受容感(仲間を受け入れられているという思い)」「身体的有能さの認知(ここまでできるという思い)」のうち、「身体的有能さの認知」にもっとも、大きな高まりが見られた。

活用効果

評価の観点	運動についての思考・判断
具体的変容	ICT機器を活用して自分のフォームを動画や静止画で確認し、欠点を視覚的にとらえることができたため、その克服に向けて進んで練習の場を選び、友だちと声を掛け合いながら協力して練習を進めることができた。

実践の手応え

動きを正しくイメージしたり自分のフォームを客観的に分析したりするためにも、体育の学習でのICT機器の有効性を改めて感じた。また、毎時間、児童の様子を撮り続け、その変容が分かるよう動画編集ソフトウェアで編集して児童に見せたことで、児童は、日々、自分が上達していく姿を客観的にとらえることができた。このことが、今まで「自分は体育が苦手だ」と感じていた児童の自信につながった。